

祇園囃子が誘うものまとめ

(ネームドNPCリストについては赤誠組シリーズのまとめを参照です)

こんちきちん。こんちきちん——。日和の京に夏を告げる祭囃子が響く。約一か月間にわたり行われる大きなその祭は、多くの人々を京へと誘う。多く、多く。無論、その中には——望まれぬ者たちも。京の治安を預かる者たちは、祭りに乗じて悪行を成さんとする者たちを捉えるべく、その鋭い眼を花の都へと光らせた。しかし、事件は起きてしまう。それは偶然か、あるいは必然か。海上娼船ファイサリス セッション 『祇園囃子が誘うもの』——運命は、分岐する——

到着

キョウの都の暑さに驚く一行は、赤誠組の歓待を受ける。ソウシと旧交を温めるヘラ。しかし、トシゾウからは妙な違和感を感じる。イサミから日頃の働きに感謝したいと言われる一行。数千年の歴史を持つ祇園祭に触れて日頃の重圧から解放されて欲しいと、言われ、さっそく初日の自由行動に入る。祭に賑わう都は普段よりも人が多く賑やかだった。

道中の内緒話

アヅマで行動するために服装を整えたいと申し出た一行。それならばとソウシに秘密めいた場所に導かれる。
その道中で攘夷派の活動が激化しているということに加えて、**トシゾウに新たな悩みが生まれている**とこっそり一行に伝えるソウシ。
先代の筆頭局長の吉澤を成敗してからキョウに赤誠組の名は鳴り響いているがその分討幕派は赤誠組を目の敵にするようになる。以前も都に攻め上ったチョウシュウ藩と市街戦になり撃退には成功したが、参謀が必要という意見が出て、**新たに伊織甲子太郎という人物を抱えることになったという。伊織は弁舌に優れ軍略にも長けているが、彼の思想の中に佐幕ではなく討幕の思想があるという報告があったという。**それがトシゾウの悩みの中心であり、サンナンも気を揉んでいるという。**トシゾウだけでなくサンナンにも何か悩みがあるような様子がある**とのことだった。

海坊主の驚異

ソウシに案内された店は廃屋のようにしか見えなかったが、中にはミノタウロスともつかない立派な体躯の禿げ頭のアヅマ人男性が出現する。その男は呉服屋らしく、様々なものを器用に作ってくれた。

アリーヤは夏用の着物を、ヘラには白いドレスのような着物を、シエルには鎧と同じような防御効果のある黒い着物をあつらえてくれた。(シナリオ限定アイテム)

そこで突然咳き込むソウシ。彼が言うには裏通りにある呉服屋が埃っぽいだけのようだが…

さらにヘラは兄弟狐の人形を、シエルはラフィーユのフィギュアを作ってもらってもいい、全員で海坊主へのコネクションを獲得するのだった。

それぞれの二日目

女性隊士に取り囲まれ美容への意識が高まるヘラ。
トシゾウと将棋で対戦するシエル。
飽きてぼんやりするアリーヤ。
ソウシを診察するミカゲ。

トシゾウの将棋は兵の士気はまだ気を配った謎理論で動く怪しげなもので率直に言って弱い。将棋を横で眺めながらトシゾウに悩みについて訊くヘラ。ソウシの体調についてはトシゾウも薄々分かっているものの、ソウシが医者にかかりたがらないから、どうしようもないと諦めている雰囲気。伊織については、ヘイスケが強く推すから赤誠組に入れたものの、野望にぎらついた目が気になる様子。ヘイスケは純真なところがあり感化されやすいともいう。ヘラは一度伊織を見ておくといいとトシゾウに言われた。

ソウシの症状は『昨日の咳は埃が原因と言っていましたが、それにしても違和感のある咳の出方でした。また、初めて出会った時に比べれば若干体重の減少が見られます。とはいえ、あくまで推論や違和感の段階であり、夏風邪をはじめとした各種よくある病の症状とも酷似しており、これ、という断定は難しい状態です』と、今だ曖昧な域を出ず、ミカゲはソウシに対して定期的に医師に診てもらおうようにとしか言うことができなかった。

続・それぞれの二日目

サンナンと市中に出かけるミカゲ。
サンナンは語る。

『……京の街は美しい。この祭りも、千年も昔から伝わっている伝統深いものだ。私は、この街を。この伝統を重んじる国を守りたい。そう思って、刀を手にとったんだ』

生命を大切にしてほしいと言うミカゲに寂しそうに悲しそうに答えるサンナン

『ああ、だから無駄に命を捨てるつもりはないよ。でもね……すこし、疑問なんだ。私たちは…本当に正しいのかと。諸外国の脅威に立ち向かうため……それは間違いない。だが……伊織先生が来てから、今までと少しだけ違う方向を見ている隊士たちが増えているのも事実なんだ。そんな中、赤誠組があり続けるために、トシも隊内に目を光らせている。鬼の副長……その在り方は、本当に正しいんだろうか。彼は、後悔していないんだろうか。私は……心配なんだ。彼は……いや。試衛館のみんなは、家族だからね』

トシゾウは無理はしているが後悔はしていないはずだと答えるミカゲ。

『…ありがとう。すこし、楽になれたよ。私は少し……遊郭へ。明里に会いに行ってくるよ。君は…よかったら、伊織先生にも会ってみるといい。あの人は、赤誠組に。この国に何かを成してくれる人なのか、あるいは……。人の噂だけでなく、目で見ることも必要だろう？』

そう言ってミカゲと別れるサンナン。彼はこれを最後に消息を絶つ。

一方トシゾウは、ヘラの見守る中、無謀な将棋を打ち続けている。

家族同然の仲間のために守ることも考えてほしいというヘラ。

『…その言葉、ありがたく受け取っておく。だがな……修羅の地獄ってのは、一度踏み込めば帰ってこれねえんだよ。戦い斬り合い出口のねえ道だ。この世を生きるにや鬼になるしかねえ。血飛沫を産湯に、未練を残さずな。——この盤面は一旦こまでだ。続きは……そうだな。俺がいつか鬼でなくても生きられる日がきたら指してくれ』

そう言って覚悟を示すトシゾウだった。

一方アリーヤはカシタロウに心酔している隊士がどの程度いるのか探りを入れていた。

カシタロウの講義で赤誠組に内部分裂が発生しているのではないかと考えたアリーヤだが、思ったほどカシタロウの影響が強くないことを知る。そして、昼食時にカシタロウについて噂をしているゲンザブロウとフィア(十番隊ドラゴニュート隊士)の会話に入る。カシタロウはホモでありあまり信用できないと言うゲンザブロウ。肉体の美しさを褒められたという満更でもなさそうなフィアをゲンザブロウは叩きなおそうと道場に引きずって行き、シンパチとの超人的な稽古に入るのだった。

甲子太郎との遭遇

ヘラとミカゲは伊織甲子太郎のヘイスケと若い隊士たち相手の講義を廊下で盗み聞きする。

武だけではなく知識もまた武器になると説くカシタロウ。
尊王攘夷思想について説明していたカシタロウだが内容が少しずつ変わっていく。
カシタロウの主張は赤誠組と一致する部分もあるが、この国に改革が必要とも説く。その改革は危険な響きはらんでいた。

『そして何よりも！！この国に必要なものは！優雅で、華麗で、美しい思想なのです！！さあ皆さん！！美しき花に集う蝶のように、この乱世を典雅に 舞うのです！！』

この美しさとは一体何なのか。疑惑を深めるヘラとミカゲ。

その一方で、以前の冒険で微妙な関係になっていたヘラとミカゲは関係の修復を始めるのだった。

続々・それぞれの二日目

講義が終ったカシタロウを尾行して何者かと接触していないかと探るミカゲ。しかし、カシタロウは隙を見せず、尾行もばれてしまう。そこに**和によってアツマを一つにまとめるべきで、チョウシュウやサツマとも和を結ぶ必要がある、敵を斬るだけではいけない**のだと、持論を展開するカシタロウ。だが、ミカゲはカシタロウの尻尾を掴むことができず、うっかりカシタロウについて行って美についての長い話を聞かされることとなった。

一方のヘラはヘイスケとカシタロウについて話をする。
ヘイスケはカシタロウのことを尊敬する一方でトシゾウとカシタロウの折り合いが悪いことも承知していて、二人の仲立ちをしたいとまで語る。その純粹さに不安を感じるヘラだった。

さらにイサミの部屋に移動するヘラと殺人的な稽古から避難してきたアリーヤはばったりと会ってしまう。そこでヘラはイサミにトシゾウとカシタロウの不和について尋ねた。

『そのことか……………。結論だけ言うなら、今は何とも言えん。カシタロウ殿のおかげで赤誠組の力が増したのは事実だ。内外共にな。もちろん、トシの懸念もわかる。だが、現状はあくまで憶測にすぎん。今はどうこう動けないのが現状だ。それに……気持ちにはありがたいが、キミたちを招いたのは、純粹に祭りを楽しんでもらうためだ。今は我らに任せて、余暇を楽しんでもらえると嬉しいのだが？』

と、カシタロウが来てから隊の出費が増えたことをさりげなく伝えつつもはぐらかす。いつでも力になるというヘラとアリーヤの言葉に、

『うむ。もちろんだ。私にとって、キミたちもかけがえのない仲間であり家族だからな。——と、もうそろそろ夕餉の時間だな。明日からは後祭。都中を山車が練り歩く、ギオン祭りの目玉だ。今夜は早く寝ることを勧めるぞ！！』

その夜は祭りの花火に彩られつつふけていく…

急転

それぞれの朝を迎えた一行。

全員が副長の部屋に呼び出され、トシゾウとイサミからサンナンが姿を消したと伝えられる。

サンナンは遊女と一緒に東の方へ向かってキョウの都を出て行ったとの報告があるという。シンパチをはじめとする隊士たちには捜索を命じてあると言う。珍しく取り乱すトシゾウとイサミ。トシゾウは一行に向かって土下座をして依頼する。

『悪い……。おまえらを呼んだのは依頼だ。サンナンの後を追ってほしい。内容はそれだけだ。——これは一人言だが。真意を探れば……。俺がどうとでもケツを拭いてやれる。これを頼めるのは……。おまえらか、ソウシぐらいだ。頼む』

トシゾウからの依頼内容はあくまでも【三南敬助の後を追う】というシステムメッセージが入りつつ、一行に判断を促す。それぞれに一行に頼み込むトシゾウとイサミ。

『…頼んだ。今のところ、**東の方へ京を歩いてた**、という情報しかねえ。とはいえ、向こうは女連れだ。旅慣れた足で……。あるいは**関所で馬を借りれば、追いつくのは容易い**だろう。あとは……。頼む』

『……。言うまでもないかもしれないが、報酬は十二分に出す。無論、口止め料込だが。頼んだぞ……』

その言葉を背に、キョウの東の出口に急行する一行だった。

追跡

サンナンの行方を追ってキョウの東の出口に来た一行。

門番に聞き込みをかけるミカゲだが大した情報は得られない。

しかし、へらは露店の店主から、**サンナンらしき男性と綺麗な女性が一週間分ほどの食糧を買って行った**という情報を得る。店主の話では**二週間ほどの旅をするのではないかといい、旅慣れない女性が行く**のだからトウカイドウを経てトートまで行くのではないかと予想を立てた。

ミカゲは情報収集に失敗してすぐに馬の手配を始める。徒歩で移動する二人なら馬で追えば早い。出発直前に、一人でサンナンへの思いに整理をつけるミカゲ。

そして、一行は馬で移動し道中で情報を収集しながら、**ついに三日目で、サンナンと女性らしい人影に追いついた。**

予兆

夜中にふと目覚めるソウシ。

『どうしたんだろう……。こんな気分は。夜の夜中に…寝付けない。——**断末魔が、聞こえるぞ……三南さんの…叫び声。最初は…小さな、綻びが。絡み合って、解れてく…僕の家族が……。だが！走れぬこの身！！まるで祭りの後夜祭。あんなに…好きだった、兄弟が。なぜか……法度を破って……ち・ま・つ・り……』**

止めにかかる傍付きの剣士を振り切るソウシ。

『寝れるものか！屍じゃない！！——寝る時は、死ぬとき』

旅支度も程々に馬に跨り駆ける。——天は騙る。【祭りの太鼓で胸を討て】と。